

**科学研究費助成事業 研究成果報告書**

平成 29 年 6 月 8 日現在

機関番号：16401

研究種目：基盤研究(C) (一般)

研究期間：2014～2016

課題番号：26381216

研究課題名(和文) 活用力を育成する小・中学校における「伝統的な言語文化」(古典)学習モデルの開発

研究課題名(英文) Development of traditional language culture (classics) study model in elementary and junior high schools to cultivate practical application skills

研究代表者

武久 康高 (TAKEHISA, YASUTAKA)

高知大学・教育研究部人文社会科学系教育学部門・准教授

研究者番号：70461308

交付決定額(研究期間全体)：(直接経費) 1,600,000円

研究成果の概要(和文)：「PISAショック」以降、我が国の「読解力」には、読解の知識・技能を実生活で直面する諸課題において活用できる力、つまり「知識・技能の活用力」が内包されるようになった。だが、全国の学校現場で展開されている古典の授業は、未だに「知識・技能の習得」に偏重している。その原因としては、習得した「知識・技能」を「活用」するような古典学習のモデルが開発されていないことが挙げられる。

本研究では、小学校・中学校教科書における古典の定番教材(小学校5年・6年：枕草子、中学校1年生：竹取物語、2年生：平家物語、3年生：枕草子)を取り上げ、その学習を通じて育成しうる「活用力」について明らかにした。

研究成果の概要(英文)： Since the PISA Crisis, reading skills in Japan have involved applying reading knowledge and abilities to the various issues we face in our lives, in other words, skills that apply knowledge and abilities in a practical manner. However, there is still too much emphasis on traditional knowledge and abilities in classics classes that are held in schools nationwide. The cause of this can be said to be that a classics study model that applies the knowledge and abilities that have been learned has not been developed.

This study focused on typical classics texts in elementary and junior high school textbooks (elementary school: 5th year, 6th year: The Pillow Book; junior high school: 1st year: The Tale of the Bamboo Cutter, 2nd year: The Tale of the Heike, 3rd year: The Pillow Book) and clarified practical applications skills that could be cultivated through their study.

研究分野：日本文学

キーワード：古典教育 活用 枕草子 平家物語 竹取物語 伝統的言語文化

## 1. 研究開始当初の背景

OECDが実施するPISA調査(生徒の学習到達度調査)の目的は、読解の知識・技能を実生活で直面する諸課題においてどの程度活用できるかを評価することである。このPISA2003調査における「読解力」の得点が低かった我が国では、2007年より実施する全国学力・学習状況調査(文部科学省)において、従来の学力測定に準じた国語Aの問題に加え、PISA調査と同様の「基礎的な知識・技能を活用し、自ら考え、判断し、表現する力」について問う国語Bの問題を設定した。「PISAショック」以降のこうした変化からは、生徒に必要な国語の学力として、知識の習得とともにその活用力が重視されるようになったこと、そのため文部科学省は、全国学力・学習状況調査を通じてに関する生徒の学力の現状を把握し、さらなる指導の充実や学習状況の改善を目指していることが窺える。

ところで、上記のような状況は、新学習指導要領に設けられた「伝統的な言語文化に関する事項」の目的からも確認できる。ここでは「小学校、中学校及び高等学校を通じて」「我が国の言語文化を享受し継承・発展させる態度を育てる」こと、つまり小学校から高等学校までの古典の授業を通じて、児童・生徒が伝統的な言語文化を理解(享受)するとともに、それを現代社会に継承・発展させること、いわば古典の読解や鑑賞に関する知識・技能を現代社会に活用することが謳われているからである。こうした「古典の読解に関する知識・技能の習得とその活用」を目指す古典学習とは、と同様の国語学力観のもとにあると見てよい。だが、このように「知識・技能の習得」と「活用」の両者が「伝統的な言語文化に関する事項」の目的として示されているにも関わらず、多くの実践報告からは「知識・技能の習得」、つまり従来型の学力育成のみに力を注ぐ学校現場の現状が窺える。さらに全国学力・学習状況調査においても、古典そのものが出題されるのは国語A(知識の習得状況について測定)のみであり、知識の活用力を問う国語Bにおいては取りあげられていない。つまり、授業改善のために行われる全国学力・学習状況調査が想定する古典の学習も「知識・技能の習得」に特化されてしまっているといえる。

## 2. 研究の目的

前述したような古典学習における「知識・技能の習得」偏重の原因は、「古典読解に関する知識・技能の「活用」に関する学習モデル」の開発がなされていないところにある。もちろん「知識・技能の「活用」に関する学習モデル」と一口にいても、教材の特性や学年、授業のねらいなどによって様々なパターンが考えられる。そこで本研究では、小学校高学年および中学の各学年で用いられている代表的な教材をもとに、「活用力」を育

成する学習モデルを開発することを目的とする。

## 3. 研究の方法

多くの小中学校で実践可能な活用型古文授業の学習モデルとするため、教材は小学校高学年、中学校1・2・3年生の教科書に採録されている代表的な教材とする。

小学校高学年(『枕草子』春はあけぼの)

中学1年生(『竹取物語』昇天)

中学2年生(『平家物語』扇の的)

中学3年生(『枕草子』春はあけぼの)

学習モデルについては、「他テキストと関連させて読む」(中学1・2・3年生)や「作品の構造に着目して読む」(小学校高学年)といった方法を活用することでそれぞれの教材が持つ特質やその価値に気付くといった学習、および授業を通じて読み取った教材の特質(知識)を具体的な文脈で活用することを通じて、教材や自分、社会への理解を深めていく学習を含むこととする。

また、構想した学習モデルについては可能な限り実践の場で検証し、より汎用性の高いものとする。

## 4. 研究成果

ここではまず、実践の場での検証を踏まえ開発した学習モデルについて提示する。

### (1) 中学校

#### (1-1) 中学校1年生『竹取物語』『昇天』

##### 【教材価値】

『竹取物語』は「物語の始まり」の作品として説明される。ここでいう「物語の始まり」とは、平仮名が生まれる前から語り継がれてきた伝承の枠組みを継承しながらも、そこで「人間や人間の心への関心」を語りの主眼としておくことにより、伝承の型を越えた虚構世界(=物語)が誕生したことを指している。こうした「物語の始まり」としての『竹取物語』が持つ教材価値は、『竹取物語』が「物語」という形式でどのような人間の姿を描き出すことに成功したのか探ることによって、学習者自身が「物語の始まり」の現場を追体験したり、そこでの語りのあり方について評価(批評)できる点にあると指摘できる。

##### 【学習モデル】

『竹取物語』『昇天』場面の表現特性を羽衣伝承との比較を通じて理解する。

[問1]羽衣伝承と『竹取物語』とで「天の羽衣」の機能はどのように異なるだろうか。

[問2]かぐや姫は「天の羽衣」の機能(「心異になる」こと)を物思う前から知っていたのだろうか。また、それを知っているのと知らないのでは、「天の羽衣」を着て月の都へと帰らなければならないかぐや姫の物思いの深さは異なるだろうか。

[問3]かぐや姫は翁や媼に対して、「自分が天人になった後の変化」を伝えているだろうか。あなたの考えを答えなさい。

[問4]羽衣伝承と『竹取物語』とでは「天の

羽衣」の機能が変えられている。そのことをどう思うか。天の羽衣の機能の変化がくや姫と翁媪、帝らとの別れの場面にもたらした効果等も考えて答えなさい。

【共通する素材の描かれ方の違いから両テキストを比較するための発問。ここで明らかとなった表現特性(『竹取物語』では「心を持つ人間存在のありよう」が描き出されていること)について生徒が批評することを活動の目的としている】

### で読み取った『竹取物語』の表現特性を現実の文脈で活用する。

[問5]当時の新聞記者となり、まだ「物語」を読んだことのない平安時代の女房たちに対して、「物語の始まり」である『竹取物語』の面白さを伝えよう。

【『竹取物語』の新しさや面白さ、そこで描かれている人間の姿などを記事にするといった、で学んだことを活用せざるをえない具体的な場を設定することで、『竹取物語』の理解を深める活動】

## (1-2) 中学校2年生『平家物語』「扇の的」

### 【教材価値】

『平家物語』とは「勝利者の武の力を単純に賛美するだけの文学には終わらず、そうした勝ち負けの視点を越え、戦いの現実そのものに目を向けて語られているテキストと言える。そしてそうした語る行為を通じて、「戦いとはいったい何を人々にもたらすのか」といった「過去への問いかけ」がなされているのである。ちなみに『平家物語』は、武家の時代が比較的安定を迎え、余裕を持って過去を振り返ることができた時代に誕生したと言われている。これは第二次世界大戦後の比較的安定した時代である現代と同じような状況と言える。だからこそ今、『平家物語』が行っている「過去への問いかけ」を学び、学習者自ら同じように過去へと問いかける必要があるのである。

### 【学習モデル】

『平家物語』「扇の的」における戦の描かれ方(「年五十ばかりなる男」の射殺場面)の特徴を『源平盛衰記』との比較を通じて理解する。

[問1]『源平盛衰記』において、舞を舞った家員を「射よ」と言った人と「射るな」と言った人の理由を説明し、両者の意見を「武士の名誉」「情」「勝利第一主義」という言葉で整理しよう。

[問2]『源平盛衰記』では、二度における弓矢の手柄により、与一は義経や人々から賞賛される。与一が賞賛された理由を「武士の名誉」「情」「勝利第一主義」という言葉で整理しよう。

【源平盛衰記の表現特性(射殺を肯定する立場)を捉えるための発問】

[問3]『源平盛衰記』と『平家物語』「扇の的」との共通点と相違点をまとめなさい。

【比較を通じて「扇の的」の表現特性(理

由も示されず人が殺される戦の現実のみが記され、それへの評価は読者に委ねる語り)を捉えるための発問】

で読み取った『平家物語』理解を補助教材である「敦盛最期」「知章最期」「小宰相身投」「先帝身投」の読みにおいて活用し、『平家物語』の問いかけにせまる。

[問4]『平家物語』中の4場面(「敦盛最期」「知章最期」「小宰相身投」「先帝身投」)から1つ選び、その場面を通じて作者が読者に伝えたかったことは何か、での学習を活かして話し合おう。さらにその「作者が伝えたかったこと」が伝わるような音読の仕方を班で考え、発表会をしよう。

【読み取った『平家物語』の表現特性を、補助教材の読解や表現活動(音読)へと活用する活動】

[問5]「扇の的」や班活動・音読発表会で学習した4場面を通じて『平家物語』が伝えたかったことは何か捉え、それについて自分の考えを書こう。

【読み取った『平家物語』の表現特性をもとに、そこから自らや社会への理解を深めるための活動】

## (1-3) 中学3年生『枕草子』「春はあけぼの」

### 【教材価値】

『枕草子』が書かれた時代、貴族や女房たちが持つ季節感や美意識の形成にとって『古今和歌集』『後撰和歌集』『拾遺和歌集』などの和歌は非常に大きな影響力をもっていた。そんななか『枕草子』の跋文からは、世の人を支配する美意識の存在(三代集等)を自覚しながらも、「自分が思うことを自由に書く」とする清少納言の姿勢が窺える。こうした同時代の支配的な美意識とのせめぎ合いのなかで表現活動を行っているところに『枕草子』の教材価値が見いだせる。

### 【学習モデル】

【例】春の段：有名な文章を自分の目線で書き換えよう

「春はあけぼの」各段の表現特性を、同時代の美意識との関係から読み取る。

[問1]次の和歌は『拾遺和歌集』春部の冒頭に配置されている新春の様子を詠んだ歌である。ABに共通して描かれている情景をあげなさい。

A 春立つといふばかりにやみ吉野の山も霞て今朝は見ゆらん(拾遺集・春・一)

B 吉野山峰の白雪いつ消えて今朝は霞の立ち変はるらん(拾遺集・春・四)

【当時の典型的な春の美意識を理解する活動】

[問2]ABと同時代に書かれた『枕草子』でも、その冒頭に新春と思われる様子が描かれている。ABの和歌と「春はあけぼの」春の段との共通点や相違点を、描かれている景物に注目して答えなさい。

【典型的な春の美意識と枕草子との共通点や相違点を理解する活動。典型的な美

意識を利用しつつ枕草子はどのような表現を行っているか探ることが目的]

**で読み取った表現特性を使った活動を行うことで、『枕草子』への理解とともに自分や社会への理解を深める。**

[問3] 典型的な春の情景が描かれた現代の文章を、その素材や構成を利用しつつ自分なりの目線で書き換えなさい。

【読み取った『枕草子』の表現特性をもとに、それを自分の表現に活かす活動】

## (2) 小学校

### (2-1) 小学校高学年『枕草子』「春はあけぼの」【教材価値】

『枕草子』が書かれた時代、貴族や女房たちが持つ季節感や美意識の形成にとって和歌は非常に大きな影響力をもっていた。そんななか『枕草子』の跋文からは、世の人を支配する美意識の存在(和歌等)を自覚しながらも、「自分が思うことを自由に書く」とする清少納言の姿勢が窺える。こうした同時代の支配的な美意識とのせめぎ合いのなかで表現活動を行っているところに『枕草子』の教材価値が見いだせる。

冒頭にある「春はあけぼの」章段は、各季節で「みんながいいと考えるもの」と「作者が『これもいい』と考えるもの」を描くという構造になっている。いわば「同時代の支配的な美意識」と「自分がいいと思うこと」とがせめぎ合う構造になっているのだが、こうした「春はあけぼの」章段の構造はそのまま『枕草子』の表現特性と重なるものと言える。また、このような「春はあけぼの」章段の構造については、「も」や「言ふべきにあらず」などの語に着目することで読み取ることが可能であり、現代語訳を使えば小学生にも理解しうるものである。ここに小学校の教材としての『枕草子』「春はあけぼの」の価値を見出すことができる。

#### 【学習モデル】

**章段の構造に注目して「春はあけぼの」の特徴を捉える。**

[注目する表現]

夏 = 「さらなり」「も」

冬 = 「言ふべきにあらず」「また」「さらでも」

秋 = 「さへ」「まいて」「言ふべきにあらず」

春 = 一場面しか描かれておらず、「も」など注目すべき言葉もない。そのためこの場面が「みんながいいと考えるもの」なのか「作者が『これもいい』と考えるもの」なのか児童に考えさせる。

配列(この配列になっている効果を考える)

春「作者が『これもいい』のみ

夏「みんながいい」「これもいい」

秋「これもいい」「みんながいい」

冬「みんながいい」「これもいい」

【章段の構造から『枕草子』の表現特性を理解する活動】

**章段の構造理解を活かして自分なりの「春はあけぼの」を書き、班で交流する。**

[問1] 各季節の「みんながいいと思うもの」を班で話し合おう

[問2] 各季節の「自分が『これもいい』と考えるもの」を各自で考えよう。

[問3] 各季節の構成は以下のABCのいずれかとし、それを春夏秋冬の順に効果的に配列しよう。

A「作者が『これもいい』のみ

B「みんながいい」「これもいい」

C「これもいい」「みんながいい」

【読み取った『枕草子』の表現特性を活用し、それを自分の表現に活かす活動】

以上のような研究成果は『活用型授業のための中学校古文学習資料集』として冊子にまとめ、主として中学校の国語科教員に配布した。冊子を送った現場の教員からは「さっそく今年度実践し、結果を報告します」といった反応が届いている。このように本研究の意義は、従来なされてこなかった活用型の古文授業を現場で実践していくためのひな型(学習モデル)を作成し、それを冊子にして現場の教員に届けることによって、より多くの教室での古文学習の改善に資することができる点にある。

また、本研究で提案した学習モデルでは、それぞれの教材が持つ特質や価値を捉えた上で、それを具体的な文脈で活用することをその柱としている。このように教材の特質や価値を正しく捉えるためには、古典作品に対する広くて深い知識や作品分析力が必要である。研究代表者は古典文学研究を専門とすることから、この点はこれまでの古典教育研究にない本研究の強みと言える。

今後は、作成した冊子をもとになされる多くの授業実践をもとに、さらにより学習モデルへと改善していく作業を行いたい。

## 5. 主な発表論文等

(研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線)

[雑誌論文](計2件)

武久康高、活用力を育成する古典授業の開発 『平家物語』『扇的』(中学校2年生)の場合、高知大学教育学部研究報告、査読無、75号、2015、43-50

武久康高、「物語の始まり」としての『竹取物語』 『竹取物語』の教材価値とその授業案、高知大学教育学部研究報告、査読無、77号、2017、33-44

[学会発表](計0件)

[図書](計1件)

武久康高、自費出版、活用型授業のための中学校古文学習資料集、2017、40

[産業財産権]

出願状況（計0件）

取得状況（計0件）

〔その他〕

ホームページ等

## 6. 研究組織

### (1) 研究代表者

武久康高（TAKEHISA, Yasutaka）  
高知大学・教育研究部人文社会科学系教育  
学部門・准教授  
研究者番号：70461308

### (2) 研究分担者

（ ）

研究者番号：

### (3) 連携研究者

（ ）

研究者番号：

### (4) 研究協力者

今村有紀（IMAMURA, Yuki）  
大坪顕彦（OTSUBO, Akihiko）  
内藤充哉（NAITO, Michiya）